

偉いことが当たり前になる世の中へ

中 三

僕には障害がありません。しかし、これから先どうなるかはわかりません。このことは僕も含め、みんなに言えることです。

高齢化社会が進んでいる今、高齢になるにつれて体の自由がきかなくなる人が増えていきます。街を歩いていると目の不自由な人や足の不自由な人など、体に障害のある人を見かけます。その時僕は、体にかかる負担は大きいのではないかと考えます。街中の道路にあるほんの小さな段差でも、障害のある人から見ると体力を奪う、とても大きい段差なのかもしれません。

先日、僕の親が腹部の手術を受けるために入院しました。そして、無事に手術を終えて家に帰ってきました。そのとき、帰りに利用したバスの中にある段差一段一段がとても疲れると言っていました。それから数日、僕の親は自転車通勤するのが困難なためバスを利用していましたが、その度にあの段差は疲れると言っていました。足を手

術したわけでもないのにあの段差を越えるだけでとても疲れるというなら、足に障害のある人が同じようにバスを利用したら更に負担がかかると思います。

また、僕は、街中で目の不自由な人を見かけたとき、その人は日常の中で様々な苦勞をしているのではないかと思ってしまう。なぜなら、もし僕の目に重い障害があったら周りのものが何も見えないので、僕はそこにいるだけで不安を抱えてしまい、次の一步を踏み出すことができないと思うからです。

その他にも何らかの障害がある人は日々の生活の中で様々な困難と向き合っているといます。そして、その困難を少しでも小さくするために必要なことは、周りにいる障害のない人の助けです。

しかし、障害のある人たちはその助けを常に求めているわけではありません。本当に困っているときに助けることこそが本来の人助けだと僕は思います。障害のある人をたくさん助けることは良いことですが、過剰なのは良いことではありません。障害のある人も自分の力で成し遂げたいことがあります。できることも手助けしてしまっ

障害のある人たちがそれを達成したときの喜びを奪ってしまうのと同じことです。そうしないために周りにはいる人たちが気を付けなくてはいけないことは、相手の気持ちを考えて行動することです。例えば、駅で出口に向かっていている目の不自由な人を見かけたとき、その人をサポートしようと声をかけるよりも先に体に触れてしまうと、触れられた人は急な出来事に驚いてしまいます。これは、サポートする側が相手の気持ちを考えずに行動してしまったがために起きる出来事です。このことから、サポートをする人に大切なことは相手の気持ちを考えた上で行動することだといえます。そこで間違えてはいけないのは、障害のある人を助けるということは偉い、と勘違いしてしまうことです。つまり、誰かをサポートするということが当たり前の中の世になれば、障害のある人も周りへの気遣いや不安を抱くことなくどこにいても安心して行動できると思います。僕はこの作文から障害の有無の前に、僕たちは一人一人の人間だということをみんなに改めて理解してほしいです。

これから先、僕はおそらく障害のある人と関わ

る機会があります。その時、積極的に声をかけ、その人の役に少しでも立ちたいです。

僕は以前、伝統というものが自分から周りの人に、そしてその次の世代に受け継がれることで初めて成り立つのだと学びました。だから、僕の行動を誰かが見て、その次の世代につながるのだとしたら、僕は率先して障害のある人の役に立ちたいです。その結果、障害のある人が周りからのサポートを遠慮なく安心して受けられるようになって、サポートすることが当たり前の中の世の中に近づいたと言えると思います。また、これは一人一人の意識が何よりも大切です。これを読んだ人にそのことも伝われば、今は偉いことが当たり前になる世の中が更に近づくと思います。